

2004

リラックスチェア

Relax chair

A D 04 石井 碧波
指導教員 小西 均

1.研究目的

ストレス社会の現代、私たちは生活の場で癒しや安らぎを知らずしらずのうちに求めている。快適でよりよいプライベートな時間を過ごすために様々な道具が使用されている。本研究は心身をリラックスさせる道具として椅子をとらえ、身体的な休息と共に視覚心理に反映する造形の可能性について考察を行い、リラックスに対して適確な椅子を提案し、制作することにした。

2.調査と分析

「休息」や「リラックス」といったキーワードで、私たちの生活で一番身近な道具は椅子(ソファーも含む)である。上記のキーワードをもとに歴史的なものから現代のものまで様々な既存の椅子を比較分析した。これまでの研究では、典型的な構造の椅子の座姿勢は頭と上半身の重みで腰に負担がかかり、クッションや詰め物でいくら座面を柔らかくしても一定の座姿勢を保ったまま自由に動けずにいると、最終的に尾骨に不快感を覚え心身にストレスが生じるという結果だった。従って、10分～15分毎に姿勢を変えざるを得ないことが解った。また、既存の椅子の多くは姿勢変化に対し自由度が少なく、脚を組んだり、ひざを抱え込んだり、肘掛けに脚をのせたりと、リラックスを求めている時の姿勢は様々であることが解った。しかし、従来のリラックス用の椅子では、座面と背面の角度が広く椅子としての姿勢維持、或いは次動作に無理な負担が加わりかえってストレスの原因になることも解った。

3.コンセプトの立案

ストレスを感じさせず、快適でリラックスできる椅子にとって欠かせない点を挙げると、自由な座姿勢がとれること、姿勢を頻繁に変化できること、そして必要最低限の力で起き上がれるためにオーソドックスな椅子の形を取り入れることである。多様な姿勢・姿勢変化への柔軟な対応と、姿勢変化を視覚と触覚で自然に誘発させる形態の椅子をコンセプトにデザイン展開する。

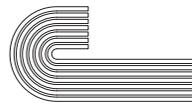
4.デザイン展開

姿勢変化の自由度と、それを感覚的に誘発させることを意識すると体に接触する部分を全て曲線で構成しなければならないので、素材は比較的容易に曲線を描ける金属を用いることにした。中でも

アルミニウムは加工がしやすく、熱伝導率が高いため熱処理で複雑な曲げ加工も施せ、また人の肌が触れても短時間で暖くなる素材なので、まず最初にアルミ帯を用いて5分の1サイズのラフモデルを作った。複雑なカーブの技術を習得し制作に当たっての基本的な寸法、様々な問題点などを知ることが出来、仕上がりの良さと効率を考え最終原寸モデルではアルミ板を使用することにした。



試作案



座面部改善案



座面部最終案

5.完成図



6.結論

検証の結果、やはり「金属は冷たく鋭い」という先入観があり、初めて座ろうとするときに多少恐怖感があるという声もあったが、外観以上に座った感じが心地よく、座り慣れてしまえば十分リラックスできるという意見が得られた。また、この椅子で自分では考えもしなかったリラックスの姿勢も発見することもできたので研究目標は達成できたと思う。しかし座面の造形上、製作していく上でやや厳しい面もあり、展開図の調整をするなどまだ改善の余地があると考える。

7.参考文献

From, Charlotte & Peter Fiell, *Chairs*, Germany : TASCHEN.
(=2002, Junko Mizuno訳『チェア』タッシェン・ジャパン.)

制作協力:株式会社かねよし(レーザー切断加工)